

論 文

女子大学生における幸福感と時間的展望体験

諸井 克英

同志社女子大学
生活科学部・人間生活学科
教授

丸山 佳美

同志社女子大学
生活科学部・人間生活学科
2009年度卒業

I. 問題

幸福感は一般的な日常経験であるにもかかわらず、実証的研究が盛んになるのは Diener (1984) が指摘するように '70年代になってからである。'73年には“*Psychological Abstracts International*”誌の検索項目に“happiness”（幸福感）が採用され、'74年には“*Social Indicators Research*”が発刊され、“subjective well-being”（主観的幸福感）に関する研究が多く掲載されるようになった。しかしながら、わが国では、'70年代後半に老年学分野で高齢者の主観的幸福感の測定が試みられるようになったが（前田・浅野・谷口, 1979など）、ようやく'90年代になり、吉森らが（吉森, 1992, 1993, 1994; 植田・吉森・有倉, 1992）、幸福感の実証的検討を体系的に試みた。また、'90年代中頃には根建・田上（1995）や石井（1997）によって欧米の幸福感研究の概観が行われた。なお、この分野では、先述したように“happiness”や“subjective well-being”の用語が使われているが、本研究では幸福感という語を用いる。

本研究の主目的は、後述する Robinson & Ryff (1999) の考えに従い、過去、現在、および未来に関する幸福感評価を支える心理学的メカニズムの実証的検討を行うことである。

最近行われた全国調査（内閣府社会経済システム, 2010）では、現在の幸福感を11点尺度で尋ねたが（「とても幸せ〈10点〉」～「とても不幸〈0点〉」）、男女ともに尺度中性点（5点）を上回っていた（男性6.24点, $N = 1397$; 女性6.69点, $N = 1498$ ）。前年度までは「現在の生活に対する満足度」を6点尺度で回答させていたが（「満足している〈5点〉」～「不満である〈0点〉」）、この場合も尺度中性

点（3点）をこえていた（3.41; 内閣府国民生活局, 2009）。このような肯定的方向への偏りは、'58年の調査以来続いており、'73年のオイルショック後でさえ「満足している」者の割合が50.4%（'74年11月）であった（総理府広報室編, 1998）。つまり、日本人の幸福感は全体的に高く維持されているのである。しかしながら、このような傾向は、日本人独特のものではなく、欧米の心理学者によって早くから気づかれていた。

例えば、Diener & Diener (1996) は、「大半の人々が自分を幸福だと考えている」ことを示す傾向について、測定方法の点から検討した。彼らは、大学生、障害者、高齢者を対象として、次の4通りの方法を用いて幸福感の測定を試みた。①自己報告尺度、②家族や友だちによる他者評定、③無作為にその時点の気分を尋ねる日常経験サンプリング法、④過去の生活出来事の想起。どのサンプルの場合も、いずれの方法でも「大半の人々が自分を幸福だと考えている」傾向が得られ、測定方法上の歪みではないと判断された。さらに、興味深いことに、Diener & Diener は、有識者、心理学専攻学生、臨床心理学専攻大学院生に、抑うつを患ったことのある米国人の割合や、肯定的な生活満足感を抱く者の割合を推測させた。その結果、抑うつが過大推定、生活満足感が過小推定され、「専門家」が、幸福感の高さに気づいていないことを明らかにした。

本研究では、「大半の人々が自分を幸福だと考えている」傾向が、過去、現在、および未来の時間的範囲の中で一貫して生じるかを検討する。

仮説 I: 過去、現在、および未来のいずれの時点でも、幸福感は高く評価される。

Robinson & Ryff (1999) は、「自分自身に関する非現実的な肯定的認知」を自己欺瞞（self-deception）と定義し、幸福感における自己欺瞞の機能を明らかにした。実際に体験されていない未来に関する種々の情報は相対的に曖昧なものであり、そのため肯定的に歪曲しやすく、自己欺瞞は、過去や現在よりも未来に関する自分について起こり

やすい。大学生に過去、現在、および未来のそれぞれの幸福感を尋ねると、未来の幸福感が過去や現在よりも高く評価され、個人的傾性として測定した自己欺瞞傾向は未来の幸福感評定にのみ影響した。また、別の研究では、Robinson & Ryff は、若年者（平均19.3歳）、中年者（46.0歳）、高齢者（73.4歳）に過去と未来の幸福感を評価させ（若年者：今まで、40-50歳代；中年者：20-25歳代、65-70歳代；高齢者：40-50歳代、10-15年先）、未来の幸福感得点から現在の得点を引いた得点を未来高揚得点として3サンプルの比較を行った。彼らの考え通り、「若年者 > 中年者 > 高齢者」の傾向が認められた。

つまり、Robinson & Ryff (1999) によると、過去や現在の幸福感は多かれ少なかれ確定的な経験に基づくが、未来の幸福感は曖昧で不確定なものに依拠することになる。したがって、次のような仮説を設定できる。

仮説Ⅱ：未来の幸福感は、過去や現在の幸福感よりも高く評価される。

ところで、Lewin (1951) は、青年期の特徴として時間的展望機能の活性化を指摘している。Lewin によれば時間的展望とは「ある与えられた時に存在する個人の心理学的未来及び心理学的過去の見解の総体」である。青年は、子どもから大人への過渡期に位置するために生じる「疾風怒濤」的心性に時間的展望の分化・拡大によって対処する。Lewin によって提起された時間的展望概念に従い、白井 (1994) は、文章完成法の予備作業を通して (白井, 1989)、時間的展望体験尺度を作成した。大学生・専門学校生を対象にこの尺度を実施し、因子分析により現在の充実感、目標指向性、過去受容、および希望の4側面を同定した。

時間的展望の概念を幸福感に適用すると、日常的に肯定的な展望を抱くことは当該時期における幸福感を高めるはずである。時間的展望について白井 (1994) が認めた側面ごとに述べると、過去受容は過去の幸福感、現在の充実感、目標指向性や希望は未来の幸福感をそれぞれ高めると予測される。

仮説Ⅲ：日常的に抱かれる時間的展望は幸福感評定に影響をおよぼす。

以上の3つの仮説を検討するために、女子大学生を対象として、幸福感と時間的展望体験を測定する質問紙調査を実施した。

Ⅱ. 方法

調査対象および調査の実施

同志社女子大学での社会心理学関係の講義を利用して、『日常生活行動』調査の名目で質問紙調査を実施した (2009年5月21日・6月1日)。回答にあたっては匿名性を保証した。また、質問紙実施後に研究目的と意義を簡潔に説明した。

青年期の範囲を逸脱している者 (25歳以上) を除き、各尺度に完全回答した女子学生316名を分析対象とした (2年生68名、3年生232名、4年生16名)。回答者の平均年齢は20.10歳 ($SD = .70$, 19~22歳) であった。

質問紙の構成

質問紙は、回答者の基本的属性に加え、①時間的展望体験尺度、②幸福感評定質問群から構成されている。

1. 時間的展望体験尺度

本研究では、回答者が日常的に抱く時間的展望体験を測定するために、白井 (1994) が Lewin (1951) に従って作成した時間的展望体験尺度項目を利用した。

「この半年間」の大学生活を思い浮かべてもらい、時間的展望体験の様々な側面を表す各項目 (Table 1-a 参照) にあてはまる程度を4点尺度で回答させた (「4. かなりあてはまる」～「1. ほとんどあてはまらない」)。なお、評定順の効果を相殺するために、評定用紙をそれぞれ頁単位 (2頁) で回答者ごとにランダムに並び替えた。

2. 幸福感評定質問群

7つの時期を呈示し、各時期における回答者自身の幸福感を評定 (想像) させた。その際、「幸せとは、様々な経験を通して、満ち足りていると感じたり、気分が良いと感じたりすること」、また、「不幸せとは、不満を感じたり、気分が落ち込んだりすること」と教示した上で、どちらが良いとか悪いということはないと説明した。設定した時期は、『過去』では、「小学4年生」、「中学2年生」、「高校2年生」だった頃、『現在』では「ここ半年間」、『未来』では、「25歳」、「45歳」、「65歳」になった頃、とした。各時期での回答者自身の様子を思い浮かべさせ (未来については想像させた)、その時期における全体的な幸福感を回答するように指示した。ここでは、具体的な出来事による幸福感ではなく、各時期全体を通しての印象を思い浮かべるように注意した。各時期での幸福感の評定は、4点尺度で行わせた (「とても幸せ」、「どちらかといえば幸せ」、「どちらかといえば不幸せ」、「とても不幸せ」)。なお、幸福感が高いほど得点が高くなるようにした (1点~4点)。

Table 1-a 時間的展望体験尺度に関する因子分析（主因子法、プロマックス回転〈 $k = 3$ 〉）の結果 — 回転後の負荷量 —

	I	II	III	IV
[I. 目標指向性]	$\langle \alpha = .86 \ r = .64 \sim .78 \rangle \quad m = 2.47 \ SD = 0.72$			
ti_a_1 私には、だいたいの将来計画がある。	.88	-.01	-.01	-.02
ti_a_2 将来のために考えて今から準備していることがある。	.80	.03	.01	-.09
ti_a_3 私には、将来の目標がある。	.78	-.05	.03	.11
ti_a_4 私の将来は漠然としていてつかみどころがない。	* -.62	-.04	.02	-.12
[II. 現在の充実感]	$\langle \alpha = .80 \ r = .59 \sim .63 \rangle \quad m = 2.53 \ SD = 0.62$			
ti_b_2 今の生活に満足している。	-.11	.74	-.02	-.01
ti_b_1 毎日の生活が充実している。	-.01	.74	.10	.05
ti_b_3 毎日が同じことのくり返して退屈だ。	* -.01	-.67	.02	.00
ti_b_4 毎日がなんとなく過ぎていく。	* -.17	-.64	.10	.01
[III. 過去の拒絶]	$\langle \alpha = .73 \ r = .51 \sim .59 \rangle \quad m = 2.07 \ SD = 0.68$			
ti_b_8 私の過去はつらいことばかりだった。	.05	.00	.76	.01
ti_b_7 過去のことはあまり思い出したくない。	.08	.01	.69	-.08
ti_b_6 私は、自分の過去を受け入れることができる。	* .13	.03	-.62	-.04
[IV. 希望]	$\langle \alpha = .76 \ r = .58 \sim .62 \rangle \quad m = 2.71 \ SD = 0.63$			
ti_a_6 私の将来には、希望がもてる。	-.01	.09	.08	.76
ti_a_9 私には未来がないような気がする。	* -.03	.04	.16	-.67
ti_a_8 自分の将来は自分でできひらく自信がある。	.09	.00	.01	.64
[因子間相関]	I	.33	-.07	.48
	II		-.22	.45
	III			-.38
[残余項目]				
ti_a_5 将来のことはあまり考えたくない。				
ti_a_7 10年後、私はどうなっているのかよく分からない。				
ti_b_5 今の自分は本当の自分ではないような気がする。				

$N = 316$

初期固有値 > 1.08 ; 初期説明率67.67%

* 逆転項目

α : Cronbach の α 係数; r : 当該項目得点と当該項目を除く合計得点とのピアソン相関

III. 結果

時間的展望体験の基本的構造

時間的展望体験の基本的構造を確認するために因子分析（主因子法、プロマックス回転〈 $k = 3$ 〉）を行った。尺度全項目について、項目平均値の偏り（ $1.5 < m < 3.5$ ）と標準偏差値（ $SD > .60$ ）のチェックを行ったがすべての項目が適切であった。4 因子解を求めたところ、白井（1994）の結果と同様な因子が抽出された。①特定因子の負荷量が十分に大きく（ ≥ 1.400 ）、②他因子への負荷が小さい（ < 1.400 ）という基準に一致しない項目を除き再度分析を行い、明確な負荷量パターンが得られるまで、このことを繰り返した。Table 1-a に示すように、目標指向性、現在の充実感、過去の拒絶、希望の各側面が現れた（過去の拒絶については、負荷量の正負を考慮して、白井（1994）の命名と逆にした）。

各因子への負荷量大きい（ ≥ 1.400 ）項目から下位尺度を構成し、信頼性分析を行った。下位尺度項目の合計得点を項目数で割った値をそれぞれの下位尺度得点とした。これらの結果も Table 1-a に記す。

時間的展望体験下位尺度 4 得点それぞれで、回答者を 3 分割した。各得点の分布を検討してほぼ 3 分の 1 になるように分割点を設定した。結果を Table 1-b に表す。

幸福感評定

「小学 4 年生」から「65 歳」の時期までの 7 時点における幸福感評定の結果を Table 2-a に示す。各時期の平均値を尺度中性点（2.5）と比較すると、仮説 I と一致して、すべての時期の幸福感は尺度中性点を有意に上回った（対応のある t 検定; $t_{(315)} = 9.53 \sim 22.17$, $p = .001$ ）。さらに、反復測定分散分析によると 7 時点の幸福感は有意に異なるといえるが、「中学 2 年生」の幸福感が他の時点よりも有意に低かった。これは、未来の幸福感が過去や現在の幸福

Table 1-b 時間的展望体験下位尺度得点に基づく回答者の分割

	N	平均値	標準偏差	範囲
[目標指向性]				
低群	103	1.64	0.35	1~2
中群	120	2.54	0.21	2.25~2.75
高群	93	3.28	0.36	3~4
[現在の充実感]				
低群	126	1.94	0.33	1.25~2.25
中群	103	2.62	0.13	2.50~2.75
高群	87	3.30	0.35	3~4
[過去の拒絶]				
低群	112	1.35	0.27	1~1.67
中群	127	2.17	0.17	2~2.33
高群	77	2.97	0.39	2.67~4
[希望]				
低群	124	2.06	0.32	1~2.33
中群	112	2.87	0.16	2.67~3
高群	80	3.50	0.24	3.33~4

Table 2-a 幸福感評定の平均値と分散分析の結果

	平均値(x)	標準偏差
小学4年生	3.15a	0.70
中学2年生	2.95b	0.83
高校2年生	3.24a	0.72
ここ半年間	3.14a	0.68
25歳	3.16a	0.53
45歳	3.20a	0.61
65歳	3.25a	0.64

[反復測定分散分析]

 $F = 9.26, df = 4.43/1395.92, p = .001$

N = 316

(x)異なる英文字は互いに有意に異なることを示す
($p < .05$; Bonferroniの方法)

感よりも高く見積もられることを予測した仮説Ⅱとは異なる。

次に、7時点の評定を対象に因子分析(主因子法、プロマックス回転($k = 3$))を試みた。これをTable 2-bに表す。初期因子固有値 > 1.00 を基準にしたところ2因子が抽出され、第Ⅰ因子には「25歳」から「65歳」までの未来に想像される幸福感が、第Ⅱ因子には「小学4年生」と「中学2年生」の過去についての幸福感が、それぞれ高く負荷した。

時間的展望体験が幸福感評定におよぼす影響

本研究では、白井(1994)と同様に時間的展望体験の4側面が抽出された。これら4側面ごとに時間的展望体験が幸福感評定にどのような影響をおよぼすかを検討した。混

Table 2-b 幸福感評定に関する因子分析(主因子法、プロマックス回転($k = 3$))の結果——回転後の負荷量——

	I	II
小学4年生	.18	.44
中学2年生	.22	.64
高校2年生	.25	.15
ここ半年間	.39	-.07
25歳	.73	-.12
45歳	.89	-.09
65歳	.81	-.08
[因子間相関]	I	.22

N = 316

初期固有値 > 1.30 ; 初期説明率56.77%

合要因の分散分析を用いた平均値比較と重回帰分析を試みた。

1. 混合要因の分散分析

被験者間要因として時間的展望体験(低群、中群、高群)、被験者内要因として評定期期(「中学2年生」から「65歳」までの7時点)を用いた 3×7 の混合要因の分散分析を行った。有意な主効果や交互作用効果が検出された場合には、下位検定を実施した。

(1) 目標指向性

評定期期の主効果のみが有意であり($F_{(4.43/1386.14)} = 9.30, p = .001$), 全体分析と同様に「中学2年生」での幸福感が他の時期と比べて低かった。

Table 3-a 幸福感評定の平均値と分散分析の結果 — 現在の充実感の効果 —

	低群 (N = 126)		〈現在の充実感〉 中群 (N = 103)		高群 (N = 87)	
	平均値(x)	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値(y)	標準偏差
小学4年生	3.08ab	0.68	3.20	0.68	3.20c	0.75
中学2年生	2.85c	0.86	3.03	0.77	2.99d	0.86
高校2年生	3.15ab	0.67	3.28	0.76	3.33bc	0.74
ここ半年間	2.79c	0.64	3.17	0.57	3.60a	0.58
25歳	3.07ab	0.54	3.17	0.51	3.30bc	0.53
45歳	3.06b	0.68	3.19	0.51	3.40b	0.56
65歳	3.15a	0.71	3.25	0.56	3.40b	0.60

[混合分散分析]		
主効果	評定期期	$F = 9.56, df = 4.41/1380.66, p = .001$
	現在の充実感	$F = 16.86, df = 2/313, p = .001$
交互作用効果	評定期期×現在の充実感	$F = 4.41, df = 8.82/1380.66, p = .001$

[交互作用効果に関する下位検定]		
(1) 「現在の充実感」各群における評定期期の効果		
	低群	$F = 7.50, df = 6/1878, p = .001$
	中群	$F = 1.90, df = 6/1878, ns.$
	高群	$F = 8.88, df = 6/1878, p = .001$
(x): 低群における評定期期の多重比較により, 異なる英文字は互いに有意に異なることを示す ($p < .05$)		
(y): 高群における評定期期の多重比較により, 異なる英文字は互いに有意に異なることを示す ($p < .05$)		
(2) 各「評定期期」における「現在の充実感」の効果		
	小学4年生	$F = 1.14, df = 2/313, ns.$
	中学2年生	$F = 1.48, df = 2/313, ns.$
	高校2年生	$F = 1.86, df = 2/313, ns.$
	ここ半年間	$F = 47.32, df = 2/313, p = .001$ [多重比較 ($p < .05$) 低 < 中 < 高]
	25歳	$F = 4.80, df = 2/313, p = .009$ 低 < 高
	45歳	$F = 8.37, df = 2/313, p = .001$ 低 < 高
	65歳	$F = 4.09, df = 2/313, p = .018$ 低 < 高

(2) 現在の充実感

Table 3-a に示すように, 評定期期および現在の充実感の主効果がそれぞれ有意であり, 有意な交互作用効果も得られた。下位検定によると, 低群と高群でのみ評定期期の有意な効果が見られた。「小学4年生」から「高校2年生」までは現在の充実感の影響は現れないが, 「ここ半年間」以降では高群の幸福感が高まっていた。この交互作用効果は仮説Ⅲを支持する。

(3) 過去の拒絶

評定期期の主効果と過去の拒絶の主効果がそれぞれ有意であった($F_{(4.44/1390.63)} = 9.71, p = .001; F_{(2/313)} = 34.17, p = .001$)。評定期期については全体と同様な傾向があり, 過去の拒絶については下位検定 (Bonferroni の方法, $p < .05$) によって「低群 > 中群 > 高群」の有意な傾向が認められた。

(4) 希望

結果を Table 3-b に表す。現在の充実感と同様に, 主効

果と交互作用効果がすべて有意であった。下位検定によれば, 希望3群ともに評定期期の有意な効果が得られた。「高校2年生」以降から希望の影響が検出され, 高群での高い幸福感が認められた。この交互作用効果は, 「高校2年生」という時期が過去に該当することを考えると, 限定的に仮説Ⅲを支持する。

2. 重回帰分析

7時点の幸福感評定得点それぞれを従属変数とし, 時間的展望体験4得点を説明変数とする7通りの重回帰分析(ステップワイズ法)を行った。結果を Table 4 に表す。

「小学4年生」, 「中学2年生」, および「高校2年生」では, 仮説Ⅲと一致して, 過去の拒絶のみが幸福感の有意な負の規定因であった。「ここ半年間」の幸福感については, 現在の充実感が有意な正の規定因, 過去の拒絶が有意な負の規定因であった。「25歳」と「65歳」の幸福感は, 仮説Ⅲと一致して希望によって有意に正の影響を被っていた。「45歳」では, 希望が有意な正の規定因, 過去の拒絶

Table 3-b 幸福感評定の平均値と分散分析の結果 — 希望の効果 —

	低群 (N = 124)		中群 (N = 112)		高群 (N = 80)	
	平均値(x)	標準偏差	平均値(y)	標準偏差	平均値(z)	標準偏差
小学4年生	3.06ab	0.68	3.20a	0.75	3.24bc	0.64
中学2年生	2.84c	0.88	2.97b	0.79	3.08c	0.81
高校2年生	3.10a	0.70	3.32a	0.67	3.36ab	0.78
ここ半年間	2.92bc	0.68	3.24a	0.67	3.32b	0.61
25歳	2.94bc	0.47	3.27a	0.50	3.38b	0.54
45歳	2.92bc	0.56	3.29a	0.54	3.51a	0.57
65歳	2.98abc	0.65	3.35a	0.60	3.54a	0.50

[混合分散分析]		
主効果	評定期期	$F = 9.93, df = 4.46/1396.46, p = .001$
	希望	$F = 32.29, df = 2/313, p = .001$
交互作用効果	評定期期×希望	$F = 1.95, df = 8.92/1396.46, p = .043$

[交互作用効果に関する下位検定]		
(1) 「現在の充実感」各群における評定期期の効果		
低群	$F = 2.71, df = 6/1878, p = .013$	
中群	$F = 4.88, df = 6/1878, p = .001$	
高群	$F = 5.61, df = 6/1878, p = .001$	
(x): 低群における評定期期の多重比較により, 異なる英文字は互いに有意に異なることを示す ($p < .05$)		
(y): 中群における評定期期の多重比較により, 異なる英文字は互いに有意に異なることを示す ($p < .05$)		
(z): 高群における評定期期の多重比較により, 異なる英文字は互いに有意に異なることを示す ($p < .05$)		
(2) 各「評定期期」における「現在の充実感」の効果		
小学4年生	$F = 1.94, df = 2/313, ns.$	
中学2年生	$F = 2.84, df = 2/313, ns.$	[多重比較 ($p < .05$)]
高校2年生	$F = 4.48, df = 2/313, p = .013$	低 < 高
ここ半年間	$F = 9.91, df = 2/313, p = .001$	低 < 高
25歳	$F = 11.24, df = 2/313, p = .001$	低 < 高
45歳	$F = 18.40, df = 2/313, p = .001$	低 < 中 < 高
65歳	$F = 16.47, df = 2/313, p = .018$	低 < 中 < 高

が有意な負の規定因であった。「ここ半年間」と「45歳」の結果については、仮説Ⅲを部分的に支持するといえよう。

IV. 考察

本研究の主目的は、幸福感と時間的展望との関係についての仮説を実証的に検討することであった。このために、青年期に位置している女子大学生を対象とした質問紙調査を行った。なお、時間的展望体験測定のために、白井(1994)による尺度を利用したが、白井が認めた4側面が再現された。

わが国での幸福感に関する全国調査(内閣府社会経済システム, 2010; 内閣府国民生活局, 2009)でも認められる「大半の人々が自分を幸福だと考えている」傾向(Diener & Diener, 1996)に関する仮説Ⅰについては、本研究では完全に支持された。設定した7時点いずれについても中性点よりも高い幸福感が得られた。したがって、先述した幸

福感評定の肯定的偏り(Diener & Diener, 1996)は堅固な心理的現象といえよう。

仮説Ⅱは、過去、現在、および未来の体験の確実性と曖昧さに基づくRobinson & Ryff(1999)の考えによっている。しかしながら、本研究では、「中学2年生」の幸福感が他の時点時期と比較して低下しており、仮説Ⅱとまったく異なっていた。ところで、「中学2年生」の時期は、青年心理学によって伝統的に確立された「青年像」(たとえば、Lewin, 1951)と現実の青年が示す行動や心性的特徴の不一致に伴い、加藤(1987)が提起した新たな青年期の区分に基づく、「青年期前期(11歳~16歳頃)」に該当する。この時期の特徴は、加藤によれば自己の変化と動揺である。

したがって、幸福感評定には、体験情報の確実性と曖昧さよりも、この「青年期前期」の感情記憶が反映されると思われる。わが国の教育制度においては、この時期は高校受験準備体験と結びつきがちな時期である。もしも受

Table 4 幸福感におよぼす時間的展望体験の影響
— 重回帰分析（ステップワイズ法）—

従属変数: 小学4年生 標準化偏回帰係数		
過去の拒絶	-.26	$p = .001$
	$R^2 = .07$	$p = .001$
従属変数: 中学2年生		
過去の拒絶	-.36	$p = .001$
	$R^2 = .13$	$p = .001$
従属変数: 高校2年生		
過去の拒絶	-.24	$p = .001$
	$R^2 = .06$	$p = .001$
従属変数: ここ半年間		
現在の充実感	.47	$p = .001$
過去の拒絶	-.12	$p = .020$
	$R^2 = .25$	$p = .001$
従属変数: 25歳		
希望	.38	$p = .001$
	$R^2 = .15$	$p = .001$
従属変数: 45歳		
希望	.40	$p = .001$
過去の拒絶	-.11	$p = .033$
	$R^2 = .20$	$p = .001$
従属変数: 65歳		
希望	.39	$p = .001$
	$R^2 = .15$	$p = .001$

$N = 316$

説明変数: 目標指向性 現在の充実感 過去の拒絶 希望
投入基準 $p < .05$; 除去基準 $p > .10$

験準備体験を否定的に想起しがちであるとすると、本研究での「高校2年生」の時点も同様に幸福感の低下が現れるはずである。しかし、直接的ではないにせよ、この時期の大学受験準備体験の結果としての「現在」があるとするれば、この時期は否定的に評価しにくいと推測できる。ところで、Wilson & Ross (2001) によれば、過去の同一の時点でも主観的な時間距離を遠くに感じるように教示されると、過去の自分に対する否定的な評価が生じる。これは、本研究での「中学2年生」の時期の否定的評価と一致する。

Robinson & Ryff (1999) によると、未来の幸福感予想は情報の曖昧さゆえに肯定的になる。ところで、本研究の質問紙調査を実施した'09年前半は、前年に起きた世界的な金融危機（リーマン・ショック、'08年9月）の影響もあり、大学生にとって肯定的な未来が描ける状況はなかった（「就職氷河期」の再来）。つまり、Robinson & Ryffの考えに基づく仮説Ⅱは体験情報の時代的中立性を前提としているが、当然ながら体験情報は当該時代の情報によ

て影響される。幸福感の「未来 > 過去・現在」という予測は、例えば当該時点の社会的エピソードの重大さを統制しなければ、検証困難であろう。しかしながら、先述したように生活上の重大エピソードである'73年のオイルショック後でさえ仮説Ⅰに一致した傾向がある（総理府広報室編、1998）。未来の描き方に単に時代条件の変動のみが影響しているわけではなく、次に述べる仮説Ⅲに関する結果からも、幸福感を支える何らかの心理学的システムが存在することも確かであろう。

日常的に抱かれる時間的展望が弁別的に幸福感に影響することを予測した仮説Ⅲについては限定的に支持された。混合要因の分散分析の結果に基づくと、有意な交互作用効果が得られたのは現在の充実感と希望のみであり、いずれも限定的に仮説Ⅲを支持した。この分析よりも、重回帰分析のほうが幸福感におよぼす時間的展望の弁別効果を明確に示した。過去の幸福感評定（「小学4年生」、「中学2年生」、「高校2年生」）には過去の拒絶のみが予測通りの影響をおよぼしていた。現在の幸福感（「ここ半年間」）は、現在の充実感と強い関わりがあった。さらに、未来の幸福感（「25歳」、「45歳」、「65歳」）の予想については、希望が促進効果を示した。これらは、仮説Ⅲで予想した弁別効果と一致する。しかしながら、「ここ半年間」と「45歳」の幸福感は、過去の拒絶と有意な関連を見せた。とりわけ、中年期の状態予想がなぜ過去に対する態度に規定されているかは不明である。

ところで、目標指向性は現在や未来の幸福感に影響をおよぼすと予測されるが、分散分析や重回帰分析ともに有意な影響がなかった。将来目標の心理的存在の有無はとりわけ未来の幸福感の高揚につながると予測できるが、本研究でなぜ何の関連もなかったのかは今後の課題といえよう。

Albert (1977) は、過去の自分と現在の自分のように異なる時点における自分の状態を比較する傾向を指摘し、継時的比較と呼んだ。自分の過去に対する態度を検討した横井・川本 (2008) は、中年者よりも大学生のほうが、過去想起を活発に行い、過去に対して否定的評価を行うことを見出した。また、継時的比較の個人差を測定する尺度を作成した並川 (2011) の研究では、継時的比較志向性が高い人が過去想起に伴う否定的な感情体験を示す傾向が見られた。これらは、本研究で依拠したRobinson & Ryff (1999) の考えに継時的比較の観点を導入する必要性を示唆している。

本研究では、幸福感の測定は時点別に単一項目で測定した。しかし、従来の幸福感を測る尺度を見ると、評価上の

異なる時間的碇泊点の混在を認めることができる。島井・大竹・宇津木・池見（2004）の日本版主観的幸福感尺度の4項目の内容は現在の幸福感を問うている。しかし、植田ら（1992）によるハピネス尺度には現在と未来の幸福感を表す内容が混在している。また、伊藤・相良・池田・川浦（2003）が作成した主観的幸福感尺度には過去との比較や未来の状態の予測が含まれている。つまり、当該人物の幸福感を過去から未来までの想定できる時間範囲におけるいつの時点に対する評価を幸福感と見なすのかという問題が浮き彫りになる。例えば、過去から未来までの想定できる時間範囲全体に対する評価を幸福感と見なすと、本研究で扱った時間的展望概念との区別が困難になる。とりわけ、本研究での7時点に関する幸福感評定の因子分析で、未来に想像される幸福感と過去についての幸福感の2次元が見出されたことは、この問題の重要性を示唆する。付随的に言えば、本研究の回答者は、「小学4年生」から「65歳」へと順に幸福感評定を行った。これは感覚・知覚判断の伝統的方法である極限法の上昇系列のみによって測定したことになる（大山・今井・和気，1994）。幸福感評定の測定論上の検討も必要であろう。

幸福感と時間的展望の関係を扱った本研究では種々の知見が得られたとともに、克服すべき研究上の問題も明らかになった。今回は女子青年を対象としたが、今後は、対象サンプルを拡大しながら、幸福感を支える心理学的メカニズムを実証的に明らかにすべきであろう。

ところで、幸福感研究は、「楽観主義やポジティブな人間の機能を強調する心理学の取り組み」（島井，2006）であるポジティブ心理学の枠組みで新たな段階を迎えている。例えば、Seligman（2002）は、幸福感（H）の公式として「 $H = S + C + V$ 」を提唱した（S: 当該人物に予め設定された幸福感の範囲; C: 生活環境; V: 自発的に統制できる要因）。今回取り組んだ実証的研究に加え、幸福感研究の概念的枠組みの確立も重要であろう。

〈付記〉

- (1) 本研究は、第2著者の丸山佳美（同志社女子大学・生活科学部人間生活学科2009年度卒業）が第1著者の下で卒業研究のために収集したデータに基づいている。
- (2) データの統計的解析にあたって、IBM SPSS Statistics version 19.0.0.1 for Windowsを利用した。
- (3) E-Mail: kmoroi@dvc.doshisha.ac.jp

V. 引用文献

- Albert, S. 1977 Temporal comparison theory. *Psychological Review*, 84, 485-503.
- Diener, E. 1984 Subjective well-being. *Psychological Bulletin*, 95, 542-575.
- Diener, E., & Diener, C. 1996 Most people are happy. *Psychological Science*, 7, 181-185.
- 石井留美 1997 主観的幸福感研究の動向 コミュニティ心理学研究, 1, 94-107.
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子・川浦康至 2003 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 74(3), 276-281.
- 加藤隆勝 1987『青年期の意識構造—その変容と多様化—』誠信書房
- 前田大作・浅野 仁・谷口和江 1979 老人の主観的幸福感の研究—モラル・スケールによる測定の試み—社会老年学, 11, 15-31.
- Lewin, K. 1951 *Field theory in social science*. Harper & Brothers. 猪股佐登留（訳）『社会科学における場の理論』1956 誠信書房
- 内閣府経済社会システム 2010 平成21年度国民生活選好度調査 http://www5.cao.go.jp/seikatsu/senkoudo/h21/21senkou_01.pdf
- 内閣府国民生活局 2009 平成20年度国民生活選好度調査 http://www5.cao.go.jp/seikatsu/senkoudo/h20/20senkou_01.pdf
- 並川 努 2011 継時的比較の個人差—継時的比較志向性尺度の作成と検討— 心理学研究, 81(4), 593-601.
- 根建由美子・田上不二夫 1995 主観的幸福感に関する展望 カウンセリング研究, 28, 203-211.
- 大山 正・今井省吾・和気典二 1994『新編 感覚・知覚心理学ハンドブック』誠信書房
- Robinson, M.D., & Ryff, C.D. 1999 The role of self-deception in perceptions of past, present, and future happiness. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 25, 595-606.
- Seligman, M.E.P. 2002 *Authentic happiness: Using the new positive psychology to realize your potential for lasting fulfillment*. Free Press. 小林裕子（訳）『世界でひとつだけの幸せ—ポジティブ心理学が教えてくれる満ち足りた人生—』2004 アスペクト
- 島井哲志（編）2006『ポジティブ心理学—21世紀の心理学

の可能性―』ナカニシヤ出版

島井哲志・大竹恵子・宇津木成介・池見 陽 2004 日本
版主観的幸福感尺度 (Subjective Happiness Scale:
SHS) の信頼性と妥当性の検討 日本公衆衛生雑誌,
51 (10), 845-853.

白井利明 1989 現代青年の時間的展望の構造(1)―大学生
と専門学校生を対象に― 大阪教育大学紀要 (第IV部門),
38(1), 21-28.

白井利明 1994 時間的展望体験尺度の作成に関する研究
心理学研究, 65, 54-60.

総理府広報室 (編) 1998 『月刊世論調査平成10年3月号国
民生活』大蔵省印刷局

植田 智・吉森 護・有倉巳幸 1992 ハッピーネスに関する
心理学的研究(2)―ハッピーネス尺度作成の試み― 広島大
学教育学部紀要 (心理学), 41, 35-40.

Wilson, A.E., & Ross, M. 2001 From chump to champ:
People's appraisals of their earlier and present selves.
Journal of Personality and Social Psychology, 80, 572
-584.

横井優子・川本恵津子 2008 過去への態度から自己をと
らえる 岡田 努・榎本博明 (編) 『パーソナリティ心理
学へのアプローチ 〈自己心理学5〉』金子書房 26-47.

吉森 護 1992 ハッピーネスに関する心理学的研究(1)―ハッ
ピネスに関する心理学的な基本問題― 広島大学教育学
部紀要 (心理学), 41, 25-34.

吉森 護 1993 ハッピーネスに関する心理学的研究(3)―ハッ
ピネスに関する心理学的理論― 広島大学教育学部紀要
(心理学), 42, 19-28.

吉森 護 1994 ハッピーネスに関する心理学的研究(4)―ハッ
ピネスと社会的関係との関連― 広島大学教育学部紀要
(心理学), 43, 115-123.

